

## 受け継いでいくために

たかだ 高田中学校 一年 とみなが 富永 まお 麻央

まず、「水」という言葉から思い浮かぶものについて考えをめぐらせてみた。水といえば一。自分に問いかけてみる。まず、真っ先に思い浮かんだのは、水道の蛇口から勢いよく流れ出る水。蛇口をひねれば、とめどもなく清浄な水がほとぼしる。並々と注いだお茶も、たっぷりのスープももちろん、流水でさらしたり、多量の水で茹でることもいとわない。また、湯船に温かい湯を満たしたり、きれいになるまで、いくらでも掛け流して洗うこともできる。普段は、その恵みに感謝の気持ちすら考えることもない。それが当たり前だと思っていた。

しかし、小学生の時、ある医師の物語を知った事を思い出した。二〇一九年に凶弾に倒れた、中村哲さんである。中村さんは、アフガニスタンで、不可能だと言われた約二十五キロの用水路を砂漠の大地に開通させ、不毛の土地を緑のじゅうたんに変えた、奇跡の人だ。一面、砂と石だらけだった硬い砂漠が途方も無い努力により、緑あふれる、豊かな、麗しい草原へと変じたのだ。私は、事後のあまりの違いに本当に同じ土地なのか、と目を見開き、胸が熱くなった。死んだような土地が、生き返り、むしろ、まだまだいけるとばかりにみなぎるような生命力にあふれかえっている。水の力は偉大だ。

中村さんの言葉にこんなものがある。

「絶対に必要なものは多くはない。恐らく、変わらずに輝き続けるのは、命への愛惜と自然に対する謙虚さである。その思いを留める限り、恐れるものは何もないと考えている。」中村さんの「なんとしてでも、やり通す」という強い志が、茶色い乾いた砂漠を、緑と人々の活気あふれる豊潤な大地に変貌させたのだ。水は数少ない絶対に必要なものの一つなのだ。そして、この用水路は中村さんの想い、人生そのものなのだ。彼だけでなく、これほど、多くの人々の人生を拓く可能性と展望に満ちたものが、水の他にあるのだろうか。水は、人間にとってはもちろん、動物や植物も、人間の興す産業や工業にも、必要不可欠である。つまり、水は生命にとって、なくてはならない根源であり、持続に必須な何にも代え難いものだ。

しかし、先進国を中心に、人口増加に伴う水問題も増えてきた。海への、汚染水の排出や漁かく用ネット、マイクロプラスチックによる、水質汚濁だ。ウミガメや海鳥が、ゴミを誤飲したり、ネットにからまり、もたえる映像は、私の脳裏に焼きついている。思い出す度、胸を押さえられるようだ。今や水が循環していることは、幼い子供でさえ知るところだ。無かったことにするかのごとく、汚物や汚水を流してしまえば、汚れた川や海になる。そして、汚い大気を吸着した汚い雨が降りそそぎ、大地をも汚染する。全てが我身に返ってくるのだ。できるかぎり、心地悪い循環ではなく、心地良い循環が望ましいのはい

うまでもない。あれほど渴望した水だったはずが、いったん継続的に手に入るとなれば、随分ぞんざいに扱われる。無かったことにした水は、また後世に間違いなく返ってくるというのにだ。

私は、このゴールデンウィーク中、特に節水を心がけた。歯みがきをする時はコップに水をため、手洗い時もこまめに水をとめた。不思議と、明るい気分になった。

これからも、節水や排水の行先を意識し続けたいと思う。ふんだんに使用する水を浄化させて排出するのは、大変な労力を要するはずだ。より節水できる場面と過度に汚染された排水を抑えるよう、考えてみたい。

私達は水に恵まれている。だからこそ、それに甘えず、水について考え続けることが肝要だ。世界の水問題にも目を向け、些細なことでも協力したい。かけがえのない水と地球を大切に、受け継いでいくために。